

## 特用家禽(アイガモ)の飼養技術

養鶏試験場 主任研究員 高橋敏方

### 1) 研究のねらい

近年、消費者の鶏肉に対する高品質化やグルメ指向によりブロイラーよりもおいしいカモ肉の需要が増大しつつある。本県でもアイガモの飼養戸数、羽数とも増加傾向にあり、特に中山間地域の特性を活かして着実に定着してきている。しかしながら、アイガモは、飼養が始まって日も浅いため、研究データが乏しく、飼養管理技術も確立されておらず、事故等の多発により生産性の低下を招いている状況にある。そこで、特用家禽の飼養管理技術を確立し、生産性の向上を図るため試験を実施した。

### 2) 研究の成果

#### (1) 試験の概要

##### ア、供試アイガモ

初年度は県内産のものを導入し、以降は自家繁殖のものを供試した。

##### イ、種禽の飼養状況

28日齢までは採卵鶏幼雛用飼料、41～140日齢までは大雛用飼料、141日以降は成鶏用飼料を使用した。

##### ウ、肥育試験

28日齢までは、ブロイラー前期用飼料(CP22.0%、ME3,050kcal/kg)を使用した。

29～112日齢はブロイラー後期用飼料(CP18.0%、ME3,150kcal/kg)を給与した。

##### エ、飼養管理

雌雄混飼で、飼料は不断給餌、自由飲水とした。ワクチネーションは2、4週齢時にニューカッスル病と伝染性気管支炎の混合ワクチンを飲水投与した。また、餌付時にタイロシンを3日間飲水投与した。

#### (2) 成果の概要

##### ア、種禽

種禽の50%産卵日齢は平均231日で、この時の平均卵重は64.5gであった。日齢毎の産卵成績は図1に示すとおりである。

181日齢頃から産卵を開始し、産卵ピークは241～270日齢で87.1%であった。また、421～450日齢には、66.7%まで低下した。これを月別に見てみると2月頃に産卵を開始し、3、4月にピークになり、季節的要因が大きく影響していることがうかがえる。

ふ化成績は(4,5月)、受精率が88.3%でほぼ鶏並みであったが、ふ化率は、対入卵45.5%、対受精卵が51.3%とかなり低い成績であった。(ふ卵温度38.0℃、湿度58～65%、平均孵化日数26日)

##### イ、肥育

平飼いでの体重の推移を図2に示した。餌付け時の平均体重は39.9gで、28日齢では641.6gであり、出荷時の112日齢では、1,633g、1,409g平均で1,521gで、飼料要求率は平均5.22であった。

112日齢までの育成率は、98.5%と良好な成績が得られた。

#### ウ、解体成績

生体重に対する正肉歩留まりは、ともほとんど変わらず、もも肉13,0%、胸肉17,7%、ささみ1,9%、合計32,6%と鶏に比較して低い歩留まりを示した。

また、肉色については、雌よりも雄の方がL値（明度）が低く、a値（赤色度）が高いため、肉眼的にも赤みの多い傾向を示した。

表1 アイガモ解体成績（平飼）

（単位：日齢、g、%）

区分	解体日齢	生体重	と体重	モモ	ムネ	ササミ	脂肪
雄	142	1,964	1,636	232(13,7)	296(17)	30(1,8)	36
雌	142	1,391	1,337	171(12,3)	255(18,3)	26(1,9)	7

注()内は生体重100に対する比率

#### 3) 普及上の留意事項

夏季に解体すると、鶏に比較して脱毛作業が難しく筆毛が残り、商品価値が低下するため、筆毛がなくなる冬季に出荷解体を実施すべきである。

また最近、アイガモを水田に放鳥して、田植えから刈り取りまで一切除草剤を使用しない無農薬米の栽培が南予地域を中心に盛んに実施されているが、一般的に、放鳥の目安は田植え後2週間、2週齢時のヒナを1反当り20～30羽である。